

マルクス恐慌論に関するテーゼ II (未定稿)

恐慌は資本制生産様式の諸矛盾の総合的な爆発

恐慌は資本主義的生産様式に内在する、言い換えれば、総資本の蓄積運動それ自体が必然的に伴う、諸矛盾の総合的な爆発であり、その暴力的な解決である。

矛盾は内的に統一された諸契機・諸関係の分離・自立化

総資本の再生産・蓄積運動は、生産と消費、生産と流通、生産と分配、生産財部門と消費財部門、工業部門と農業部門、利潤と利子、生産性と賃金、輸出と輸入、その他の本来は内的な統一性をもつさまざまな諸契機・諸関係が分離・自立化し、それらの内的関係が破れて乖離し、それらの内的統一性の維持が不可能になるという意味での矛盾を伴う。

矛盾は資本制生産様式の歴史的・階級の本制から生じる

これらの諸契機の自立化と乖離は、資本制生産様式が私的所有制度と社会的分業を一般的基礎にしなが、社会的に必要な消費財および生産財を、社会的必要あるいは人々の最終的需要に照応してではなく、個別資本の剰余価値生産とその利潤としての実現——一言で言えば剰余価値の搾取——をもっぱらの目的として競争的、無政府的に生産するという資本制生産様式の歴史的・階級の本性から必然的に発生する。

資本制生産様式の弾力性は生産・流通過程が矛盾を吸収していることの表れ

資本制生産様式が伴う諸矛盾は、一定の限度までは、諸資本の自立的で無政府的な運動過程自体が内蔵する弾力性——その弾力性の重要な部分は生産の社会化、言い換えると、迂回的生産・流通過程の媒介過程の延長と複雑化によってもたらされる——によって吸収され、媒介過程のさまざまな契機の内部に——統一的契機と乖離という形態で——解消されないまま累積する。すなわち、これらの分離と乖離とは諸矛盾が生産・流通過程の内部に吸収され、累積することを意味している。したがって、資本制生産様式を特徴づけている大きな弾力性は、生産・流通過程が増大する矛盾を吸収していることの表現である。

重要な統一的契機が限度を超えて累積すると恐慌が発現する

再生産の統合性を支える重要な統一的契機と乖離が資本の内在的弾力性の許容限度を超えて累積すると、矛盾は資本運動の突然の中断——統一的契機と乖離の暴力的発現と発散——として表面化する。言い換えれば、それは経済の過熱的ブームから突然の収縮、崩壊という過程をたどる。この過程では、有機的な全体をなす生産・流通過程における一つの矛盾の表面化が別の矛盾の顕在化を誘発し、個別資本の破綻が別の資本の破綻を誘発し、流通過程の混乱が生産過程の混乱を誘発するという連鎖的な作用によって、資

本制再生産過程自体の全体的な混乱が引き起こされる。

市場は矛盾が発現する場であると同時に矛盾を累積させる機構でもある

資本制生産様式は、内的に統一された諸契機の分離・乖離の調整をもつばら市場の諸機能（個別経営者の意思決定は市場の機能の構成要素に他ならない）に委ねているが、この市場の機能自体が矛盾を内在させている。市場の諸機能には、矛盾が累積しつつあることを市場参加者に警告する機能（価格、金利、為替レート・証券価格の変動、失業率の変動他）と並んで、市場の階層性と諸取引の連鎖構造によって矛盾の累積を隠ぺいし、競争を通じて個別資本をさらに矛盾を激化する行動に走らせる傾向とが同時に作用している。市場には一定程度まで矛盾を調整する機能が内蔵されているが、矛盾が市場の調整機能の限度をこえて累積すると、逆に矛盾を発散させ、暴力的な爆発が唯一の解決になるところまで矛盾を激化させる。

市場の隘路として現れる矛盾は個別資本にとって資本蓄積の限界ではなく克服すべき障害として現れる

再生産の矛盾——統一的契機の自立と分離——が限度を超えて拡大しつつあることを示す市場のさまざまな警告は、個別資本の立場からは販売をめぐる競争の激化あるいは市場の隘路として表れ、それは個別資本にとって絶対的な限度ではなく、競争的努力によって克服されるべき障害として表れる。このために、矛盾の深まりによって諸資本は生産と投資を抑制するのではなく、競争に勝ち残り、市場での取り分を確保するためのさらなる生産拡張と投資に駆り立てられる。したがって、矛盾が再生産の統一性の限度を突破して累積しつつあることを示唆する市場の警告が表れても、個別資本は矛盾の暴力的爆発を防止する行動を一斉にとる——恐慌の発生を未然に防止する——ことはできない。この意味で、資本の過剰蓄積の一般的な現象形態は、投資抑制ではなく競争の激化である。

恐慌の発生メカニズムと発現形態は歴史的に多様である

資本制生産様式の内在的な矛盾が、再生産のどのような契機と過程によって生み出され、吸収され、再生産の統一性を維持する限度を超えて累積されるのかは、資本制生産様式の発展段階に応じて、さらには個別資本主義国の歴史的発展過程の特殊性に応じて、多様である。言い換えれば、全体的な混乱の最初の引き金がどのような契機によって引かれるのか、また、最初の矛盾の顕在化がどのような経路で全体的な矛盾の爆発にまでいたるのかは、歴史的に生起する恐慌にそれぞれ固有の独自性をともなう。このことが、現実の恐慌の発現形態にきわめて大きな多様性と複雑性をもたらす。恐慌の単純な説明モデルは存在しない。

矛盾は直接的な生産・消費過程から遊離した結節点で累積する

一般的に言えば、資本主義の発展の初期段階では、国内流通は未発達で分散的な状態にあり、遠隔地間貿易とそれを担当する多かれ少なかれ大規模な商業資本が、再生産過程の最大の結節点となる。その結果、遠隔地間貿易が生産と消費、生産と流通、その他の諸契機の間で発生する諸矛盾を吸収し、同時に累積させるもっとも重要な部門になる。その理由は、遠隔地間貿易がそれぞれの国民経済や都市経済の内部の未発達な生産・流通過程から相対的に独立し、それら国民経済や都市経済の内部的矛盾から相対的に自立した独自の運動を展開する余地をもっているからである。

初期の恐慌は遠隔地貿易での商業恐慌およびそれに付随する信用恐慌として発現する

さらに、遠隔地間の商業はそれが一般に危険の高い長期間の取引期間を要することから、すでにその生成期いらいさまざまな信用制度や保険制度によって支えられてきた。このために、この段階の恐慌は何よりも商業恐慌と、それに付随する特殊な形態の信用恐慌---遠隔地取引の集中地における手形の決済不能、およびそれが引き起こす信用連鎖の破断（貨幣恐慌）---として発現する。言い換えると、この段階では過剰生産恐慌は商業恐慌の原因ではなく、逆に、それに付随する現象として発現する。

産業資本の発展に伴って全面的な商業恐慌が発生する

産業資本の発展にともなって、それらの供給する生産物の国内流通を専門的に担当する商業資本（卸売業および小売業）が独自の資本形態として自立的発展を遂げると、商業資本は産業資本から区別される独自の蓄積様式を発展させ、その結果、貿易部門に代わって、これらの商業資本が再生産の諸矛盾の最大の吸収部面となり、恐慌は全面的な商業恐慌と、これに付随する信用恐慌の形態で発現するようになる。

恐慌は資本価値の破壊を通じて資本制生産様式の内的矛盾を一時的に解決する

こうして恐慌は、資本制的再生産に内在するあらゆる矛盾の総合的な爆発として発現し、これによって、さまざまな形態で累積した過剰な資本を破壊し、減価させる。こうして再生産過程の内部に累積した資本の過剰蓄積とそれに伴う諸矛盾を、再生産の再起動を可能にする水準にまで、少なくとも一時的に解決する。

資本主義の再生産様式は恐慌を経て再生されるのではなく新しい様式を獲得する

産業循環の恐慌局面においては、資本は生き残りをかけて、販路の確保、利潤の維持、損失と倒産の回避、要するに価値増殖運動の継続を図るためにあらゆる可能な方策を講じる。このような個別諸資本が実行する方策は、それ自体は個別資本による無政府的な行動であるが、全体としては弱小資本、旧来の陳腐化した設備の整理・廃棄をとめない、時代に照応しない産業の縮小、その他の形態で過剰蓄積された資本の価値破壊をもたらす。さらに、これらの資本の価値破壊は、それらの資本によって雇用されていた労働者の産業予備軍へ

の編入と、雇用を維持した労働者の賃金水準の低下をとまなう。こうして、全体としての資本が新しい再生産を開始するのに必要な諸条件を再び手に入れれば、新たな再生産過程（投資と雇用のゆるやかな増加）が開始される。しかし、それは恐慌以前の再生産様式への単なる復帰ではなく、変化した、新しい再生産様式のもとでの循環の開始である。こうして資本主義の再生産様式は、恐慌が生起し、克服されるたびに、古い再生産様式から脱皮し、新しい様式をまとうことになる。

新しい再生産・循環様式は新しい基軸産業の蓄積様式によって決定される

恐慌後の新しい循環が、どのようなプロセスを経て次の新たな矛盾を累積させ、次の恐慌を引き起こすことになるのかは、一つには、恐慌後の再生産様式を担い、経済成長の推進力となる新しい基軸産業資本の蓄積様式によって決定され、もう一つには、これらの産業資本の過剰蓄積を吸収し、累積させる商業資本および貨幣資本の蓄積様式、さらにはこれら二つの形態での資本の全体的な発展と相互作用によって、決定される。

新しい再生産・循環様式は新しい矛盾吸収装置を作り出す

産業資本、商業資本、貨幣資本の関係は、資本主義的生産様式の歴史的発展にともなって構造的な変化を遂げる。資本主義の発展史は、同時に繰り返される恐慌の歴史である。その際、資本主義は一つの恐慌を経過するたびに古い生産様式から脱皮し、多かれ少なかれ新しい生産様式を生み出すが、それは言い換えれば、資本の過剰蓄積を吸収する新しい、より拡張された、より複雑で媒介された仕組みの形成をとまなう。一般的に言えば、社会的生産力の発展は、上記の意味での矛盾吸収装置の延長、拡張、多様化を、したがってそれらの相関関係の複雑化を、恐慌の発現形態の一層の多様化をとまなう。

新しい矛盾吸収装置は現実資本の再生産過程から遊離した流通諸契機の内部に形成される

拡大再生産にとまなう、より大きな規模での資本の過剰蓄積（過剰投資、過剰生産、過剰取引、過剰雇用、過剰信用他）と、これを可能にする諸契機の発展、別の言い方をすれば、再生産過程の内的・統一的諸契機の自立化と乖離（矛盾）をより大きな規模で吸収する仕組みは、現実資本の再生産過程からこれまでよりも大きく遊離した流通諸契機の形成によって、したがって商品の生産、消費の諸過程からより遠く遊離した商業と信用の発展によって可能になる。商業資本の発展は生産と消費を結びつける流通経路の延長と拡張を引き起こし、信用制度の発展は生産者と最終購買者との間に何十もの支払いと支払い猶予の連鎖を創り出す。このような現実資本の再生産からいっそう遊離した矛盾吸収装置は、商業資本が貿易と卸売業の諸条件が可能にする限度いっぱいまでその運動を拡張することによって、さらにその後には、商業資本がこの限度を突破して拡張するのを可能にする信用制度の拡張によって、過剰生産と過剰資本の巨大な貯水池を提供する。

銀行制度と擬制資本市場は矛盾吸収装置を飛躍的に拡張する

銀行制度とならんで、取引所を備えた擬制資本市場が発展すると、総資本の過剰蓄積に伴う諸矛盾を吸収し、累積させる再生産の仕組みは、飛躍的に拡張される。銀行制度が現実資本の運動に直接的に結び付いた決済制度を土台として発展するのに対して、擬制資本市場は始めから現実資本の運動から相対的に遊離した、貨幣資本の独自の資本蓄積を可能にする制度として発展する。銀行制度にとっては、産業資本と商業資本、要するに現実資本の多かれ少なかれ順調な価値増殖が自分自身の価値増殖の前提条件である。これに対して擬制資本市場では、貨幣資本の価値増殖は現実資本の価値増殖から基本的に切り離される。擬制資本市場では、銀行制度とは異なり、資本が平均利潤を生む「商品」として取引され、利子はその商品の「価格」として表れるという関係は成立しない。

擬制資本は将来の所得の資本化を通じて作り出された新たな商品である

信用制度を通じて生産され、擬制資本市場で流通する商品は、産業資本が現実の生産過程で生産した商品ではなく、産業資本の利潤を含むさまざまな形態での将来の所得が「資本化(capitalization)」されて、独自の商品形態をとった有価証券(擬制資本)である。擬制資本は、将来の所得(キャッシュフロー)が金融市場の原則にもとづいて現在の所得に還元されたものであり、その商品としての価格は、現実資本および商業資本の運動を規定する平均利潤、言い換えれば生産価格とは全く異なった原理にもとづいて決定される。すなわち、その価格は、予想される将来の所得を、買い手が期待する現在の割引率で資本還元することによって決定される。

(註1) 架空資本の形成は、資本還元と呼ばれる。規則的に反復される所得は、いずれも、平均利率に従って計算することによって、すなわち、この利率で貸し出された資本がもたらすであろう収益として計算することによって、資本に還元される。例えば、年々の所得=100 ポンド・スターリング、利率=5%であるとすれば、100 ポンド・スターリングは 2000 ポンド・スターリングの年利子であろうし、この 2000 ポンド・スターリングは、いまや、この年々の 100 ポンド・スターリングに対する法律上の所有権証書の資本価値と見なされる。(『資本論』⑩806)

(註2) 資本化とは、正確には何を意味するのか? 資本化は、金融の象徴的な創造物(entity)、言い換えれば資本家が将来の期待所得をリスクを勘案して現在価値に割り引くために利用する儀式である。この儀式は非常に長い歴史をもっている。それが最初に考案されたのはおそらく 14 世紀のいずれかの時期におけるヨーロッパの都市商人の間でのことである。それは、17 世紀には高利に対する宗教界の反対を克服し、銀行家の間での慣行になった。それは 19 世紀の中期にドイツの森林監督官によって数学的定式化を与えられた。そのイデオロギー的、理論的基礎が据えられたのは 20 世紀初頭である。それが教科書に登場し始めるのは 1950 年代ごろであり、今日専門家が「金融化(financialization)」とよぶ過程を引き起こした。そして、21 世紀始めまでに、世界中のあらゆる宗派を合計したよりも多くの信徒を擁する最強の信仰にまで成長した。(Shimshon Bichler & Jonathan Nitzan, Capital as Power, p.14, www.bnarchives.net)

擬制資本市場は現実資本の蓄積から遊離した貨幣資本を吸収する

一方で、株式会社が普及して多額の株式が発行され、他方で、政府の財政規模が大きくなって公債発行が増大し、これらの証券が流通する市場が——証券取引所の成立をともなつて——発展すると、社会のさまざまな分野で形成される貨幣資本と投機資本が、現実資本の再生産過程から遊離してこの市場に流入するようになる。その場合、これらの証券＝擬制資本の市場価格は、それ自体の額面価格から遊離して変動するために、擬制資本市場は産業資本や商業資本が現実的取引と投資のために必要とする貨幣資本の額とは無関係に、不定量の貨幣資本を吸収する。いいかえれば、擬制資本の価格変動は、現実資本の運動からまったく遊離した、貨幣資本にとっての価値増殖の機会を提供する。

(註) 米国では 19 世紀後半期に鉄道事業を中心に株式会社制度が普及した。その後 1910~20 年代には鉄道業を始めとする産業の集中が進み、その過程で莫大な額の株式が発行されるようになった。しかし、これらの株式は、鉄道事業の新たな拡張のための資金を調達する手段としてではなく、もっぱら、債務返済にあてられるか、そうでなければ大きな鉄道会社が小規模なあるいは地方の鉄道会社を買収し、資本を集中するための手段として利用された。言い換えれば、この場合、株式発行の増加とこれに伴う株式価格の変動は、鉄道事業それ自体の拡張や新投資によって促されたものではなかったのである。他方、これらの株式を購入する投資家は、投機的なポートフォリオ・インヴェスターであった。こうして、企業集中のブームにともなつて、株式流通市場が急激に拡大した(Lazonic, 1992)。同様の事態は、1960 年代のいわゆるコングロマリット・ブーム、さらには 1980 年代以降に活発化した多くの企業による株価操作としての自社株買いの現象についても見る事ができる。

Lazonic, W., Controlling the Market for Corporate Control: the Historical Significance of Managerial Capitalism, in Industrial and Corporate Change, vol.1, No.3.(1992)

貨幣資本の運動は現実資本とは異なる独自の価値増殖の形態で行われる

擬制資本の価格変動を利用した貨幣資本の価値増殖は、剰余価値生産に依拠した産業資本の価値増殖とも、商品流通に依拠した商業資本の価値増殖とも根本的に異なっている。貨幣資本の価値増殖は主として二つの形態で実現する。第一は、貨幣資本が株式や債券その他の資本資産に投資され、これらの資本資産がもたらす配当、利子他を取得することによって価値増殖する。第二は、取得した資産を取得価格よりも高く売り抜けることで、言い換えればキャピタル・ゲインの取得を通じて価値増殖する。

貨幣資本の価値増殖の一部は擬制資本の価格変動自体によって可能になる

これらのうち、配当や利子の取得を通じて実現する価値増殖は、貨幣資本の借り手が配当や利子の支払いに充当することのできる所得の大きさによって限界づけられる。言い換えれば、社会的な総所得の大きさと、そのうちで配当や利子の支払いに振り向けられる割合によって規定される。これに対して、キャピタル・ゲインを通じる価値増殖は、擬制資本

の資本還元された市場価格の変動によって可能になる。その場合、擬制資本の市場価格は単に当該擬制資本が定期的にもたらす将来の所得だけではなく、市場利子率の変動、証券発行体の財務状態、市場の動向に関する投資家の予想その他のさまざまな要因によって変動する。要するに、擬制資本の現実の市場価格は、単に現実資本の価値増殖から遊離するだけではなく、それ自体がもたらす将来の所得からも遊離して変動する。

擬制資本市場は現実資本の再生産過程から相対的に遊離した、貨幣資本の弾力的な貯水池となる。

擬制資本市場、とりわけ擬制資本がポートフォリオ投資家の間で売買される流通市場は、社会的に生み出される貨幣資本の増加に促されて、現実資本の投資活動から遊離した独自の市場として発展する。この資本形態は、現実資本のように利潤を生む投資機会の消失や最終消費の隘路という制約を受けることなく、さらに、銀行資本のように現実資本の循環運動や流通決済による制約を直接受けることがない。このために、この貯水池に流入する貨幣資本は、基本的に現実資本の価値増殖と蓄積から遊離した擬制資本の価格変動に依拠して資本としての価値増殖を実現するという意味で、遊休資本ではないが、現実資本の再生産過程から見れば過剰な貨幣資本である。

発展した擬制資本市場を備えた資本主義では恐慌は貨幣資本の過剰蓄積の発現である

こうして擬制資本市場が単に現実資本の過剰蓄積を隠ぺいし、その恐慌としての発現を繰り延べるだけではなく、さらに現実資本の再生産から見て過剰な貨幣資本の巨大な貯水池あるいは運動部面として発展し、現実資本の再生産から大きく遊離した自立的な貨幣資本の価値増殖と資本蓄積を可能にするようになった段階では、金融恐慌はもはや単に過剰生産恐慌に付随する金融部面での混乱としてではなく、それ自体過剰生産恐慌とは区別される貨幣資本の過剰蓄積とその限界を示す独自の恐慌として発現する。

(以下は続編・マルクス恐慌論に関するテーゼⅢでとりあつかう)。